

# 『弁内侍日記』の大納言三位殿

―叙位の章段をめぐって―

芹田 渚

## 一 はじめに

『弁内侍日記』<sup>(1)</sup>九九段に、建長元年（1249）、大納言三位殿と呼ばれる女房が従三位に叙せられたという記事がある。日付は書かれていないが、前後の章段から、九月八日以降、和歌に「秋」とあることから九月末日までの出来事であろうと推測される。ごく短い章段である

大納言殿、三位せさせ給ひたりし、慶び申すとて、少将内侍、秋風の身にしむばかり嬉しきやなほ人しれぬ心なるらむ  
弁内侍、かひありて今こそ三つの位山まよはぬ道はなほぞ嬉しき  
御返事、大納言三位殿、身にしみて嬉しきものと今ぞ知るただ大方の秋の初風

『弁内侍日記』の大納言三位殿 ―叙位の章段をめぐって―（芹田）

が、女性の叙位への祝賀という珍しい贈答歌をテーマとした章段である。

## 二 大納言三位の人物像

大納言三位は西園寺公経の娘、公子である。『尊卑分脈』の公経の娘には「女子」としか記されていないが、『本朝皇胤紹運録』<sup>(2)</sup>、『華頂要略』<sup>(3)</sup>、『歴代皇紀』<sup>(4)</sup>によれば後嵯峨院とのあいだに慈助法親王（建長六年（1254）生。無品。市河宮。天台座主。青蓮院門跡。尊助法親王弟子）と、悦子内親王（正元元年（1259）生。延政門院。後嵯峨院第二皇女）を生み、文応元年（1260）九月十五日に没した女性である。この一首以外の詠歌事跡は見られず、どのような生涯を送ったかもあまりわからない。

公経の娘にはほかにふたりの大納言二位がいる。また、同時期に土御門家にも大納言二位と呼ばれた女性がふたりいるが、この四人の大納言二位はいずれも本稿でとりあげる大納言三位とは別人であろうと考えられる<sup>(5)</sup>。公経の娘で後深草天皇の乳母を務めた大納言二位と、通親の娘で後嵯峨院の乳母を務めた大納言二位については秋山喜代子氏<sup>(6)</sup>、公経と実材母の娘である大納言二位と、通光の娘とされる大納言二位については寺本直彦氏<sup>(7)</sup>と井上宗雄氏<sup>(8)</sup>の説に従い事跡を整理する。

公経の娘である大納言二位のうち、ひとりとは後深草天皇の乳母である。『昭訓門院御産患記』乾元二年(303)四月三十日条には、後深草天皇の誕生直後に公経の子である室町実藤がその乳父となり、後深草天皇立坊のときに実藤の同母姉であった大納言三位も乳母になったとある。秋山氏はこのことについて「乳父について」の中で、「乳父が決定した後に、その近親者から乳母が出されるといふ方式が定着していたことになるが、こうなると乳母の中には名目的な者もあらわれてくる。」としている。その後、『平戸記』寛元二年(1244)正月十日条に女叙位で二位に叙されたと記されている。『尊卑分脈』によれば実藤の母は「舞女」である。

また、源通親の娘にも後嵯峨院乳母であった大納言二位源親子がいる。兄弟の通方、通方の子である通成とともに後嵯峨院の乳母をつとめた。秋山氏は「養君にみる子どもの養育と後見」のなかで、「後嵯峨の即位後は、政治の顧問として内裏・院御所の表向きのことを統括した外戚定通と、奥向きをとりしきった乳母親子の兄妹が、ともに後

嵯峨を支える後見であったと捉えることができる。」と指摘する。

公経と実材母の娘の名は成子である。寺本氏によると、寛元二年(1244)かその翌年に生まれ、後嵯峨院の寵愛を受け、院の没後に出家した。『増鏡』「北野の雪」では「筆は大納言の二位殿、院の上のこの頃又なき御めしうど、故入道相国の御女」とされ、この記述は『叡岳要記』と一致する。『増鏡』「あすか川」では「やむごとなき上臈」と書かれている。文永七年十月七日土御門院四十回忌の法華八講に名がある。井上氏は「秦箏相承血脈」に記されていることを指摘している。

土御門家のもうひとりの大納言二位は後嵯峨院乳母であり、『弁内侍日記』八〇段に「久我の大臣の女」すなわち通光の娘とあるが『尊卑分脈』には名前のない女性である。井上氏は、『増鏡』について、「内野の雪」や「煙の末々」にみえる「大納言二位」は、弁内侍日記宝治三年の条にみえる久我通光女であろう(乳を与えるのではない、保育の乳母であろう)。」と推定している。また、『弁内侍日記』八一段には宝治三年(1249)二月一日、閑院殿が炎上した記事がある。このなか「御所も、二位殿抱き参らせて」とあり、七歳の後深草天皇を抱き上げて避難させた二位殿もこの通光の娘をさしているか、もしくは後深草天皇乳母であった公経の娘であろう。

本記事の大納言三位は『弁内侍日記』では十四回、年次にかたよりなく名前が挙げられている女性である。多くの女房について記され

た『弁内侍日記』の中でも登場回数が多い。大納言三位本人の歌はこの九九段にしか載せられていないが、他の章段でも少将内侍の歌を評価したり、弁内侍に歌を詠むきっかけを与えたりと、弁内侍、少将内侍姉妹の歌才を認め、活躍の場を与える女性である。以下、『弁内侍日記』における大納言三位像を整理したい。日記の中では弁内侍たち後深草天皇の女房とともに行動しており、このときには後深草天皇付の女房だったと考えられる。なお、三位に叙せられる以前は「大納言殿」、以降は「大納言三位殿」と呼び分けられているが、ここでは「大納言三位」の名で統一する。

八段は寛元四年（1256）七月七日の記事である。乞巧奠の夜に雨が降ったことを奉行の頭中将の振る舞いにかけて少将内侍が歌を詠む。「頭中将の奉行がらにや、今宵の雨もしめやかに降る」など人々仰せらるれば、少将内侍、

しめじめと今宵の雨のふるまひに奉行の人の気色をぞ知る  
など申せば、大納言殿、ことに興じて笑ひ給ふもをかし」とあり、この場面では少将内侍が詠んだ「しめじめと」の歌に対して、大納言三位が「笑ひ給ふ」と書かれている。大納言三位の「笑ひ給ふ」は少将内侍に好意的で、たとえば『枕草子』<sup>(9)</sup>にある「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。」という記述のように、期待にこたえてその場に応じた和歌を詠んだ少将内侍に対する上位者からの肯定的評価を示す「笑ひ」であろう。

また、二八段は同十二月十五日に行われた御神楽の夜に女房たちが月を見に行く場面である。「月いと面白くて、人々いざなひて聞きにおはせしが、中院三位中将、雅忠の中将など、軒廊の方に見えしかば、空しくて立ち帰りたりしを、大納言殿、「この関守の心づきなご、いかが思ふ」と仰せられしかば、弁内侍、

うちも寝ぬその関守の心地して通さぬ道に立ち帰るかな」

この場面では大納言三位が「いかが思ふ」と弁内侍に問いかけ、弁内侍が応えて歌を詠んでいる。大納言三位はここでは歌を詠まないが、殿上人が居たために女房たちが月を見られなかったことを『伊勢物語』五段の「関守」をひいて弁内侍に問いかけており、姉妹の歌才を高く評価し引き出してくれる人物として描かれている。

一一七段は、建長二年（1270）八月十五夜に後嵯峨院と弁内侍と少将内侍の三人が阿弥陀仏連歌を行った場面である。そのことを知った大納言三位が、その連歌を「家の集」にいれるよう弁内侍に言う。「この折々の御連歌を、大納言三位殿聞かせ給ひて、「この恋草の御連歌、思ひ出なるべし。その由の歌よみて、家の集などに書かるべし」と仰せられしかば、弁内侍、

思ひ出の言の葉となる草ならば七車にも我ぞつむべき」

とあり、ここでも大納言三位は後嵯峨院と姉妹の詠んだ連歌を賞賛し、さらには弁内侍に歌を詠ませる人物として描かれている。

西園寺家は後深草天皇の外戚であり、また弁内侍、少将内侍ともに西園寺家の庇護を受けて宮仕えをしていることから、ふたりが大納言

三位の叙位を言祝ぐのは自然なことである。しかし、女性の叙位への祝賀として歌を詠むのは他にほとんど例のないことである。

### 三 女房の叙位を詠む歌

男性官人の昇進を祝う歌は勅撰集や私家集にも多くみられるが、女房の昇進に関する歌はあまり例がなく、現存の『弁内侍日記』にも、女性の叙位記事はほかにない。

日記や物語のなかでは、『宇津保物語』「蔵開下」<sup>(10)</sup>に「女かうぶり、一階越えて、尚侍三位の加階したまふ」、「国譲下」<sup>(11)</sup>に「女かうぶりに、女御、更衣、みなかうぶり賜はりぬ。乳母たち、加階す。」と書かれている。また、『夜の寢覚』「巻四」<sup>(12)</sup>には帝が寢覚の上の参内をうながすため「正三位の位賜はせて」とある。『源氏物語』「真木柱」<sup>(13)</sup>では冷泉帝が玉鬘へ尚侍の位を授けたことを、「宮仕の藤もなく、今年加階したまへる心」からの叙位であると述べ、「などてかくはひあひがたき紫を心に深く思ひそめけむ」と詠んでいる。冷泉帝の歌は恋歌であるため玉鬘の昇進を祝う歌ではないが、天皇との私的なつながりによって与えられた位であることが示されている。『とはすがたり』<sup>(14)</sup>四巻には、出家した二条が後深草院と再会した際、院と別れてからのことを訴えて「叙位・除目を聞く、他の家の繁昌、傍輩の昇進を聞く度に、心を痛ましめずといふことなければ」と同僚女房の昇進を耳にして悲しく思ったと述べられていることから、女性にとっても叙位は喜

ばしいことであったと知られる。

時代は下るが『竹むきが記』<sup>(15)</sup>には作者の日野名子が、やはり光厳天皇の即位式で褰帳をつとめて三位に叙せられた記事がある。「四月廿八日、改元の定にて、正慶元年と改まる。女叙位侍りしに、上階の事ありしかば……」とあるが、いずれの記述にも叙位を言祝ぐ歌はない。

女性の叙位を言祝ぐ歌の例は『玉葉集』<sup>(16)(17)</sup>にみられる。

『玉葉集』賀

今上御即位の時、大納言三位とばりあげつとめて上階して侍りし時申しつかはし侍りける 入道前太政大臣

たかみくら雲のとばりをかかぐとてのほるみはしのかひもあるかな 一〇九〇

延慶元年(1308)、花園天皇が即位したときに褰帳をつとめた為子(為教の娘)が従三位に叙せられたことを西園寺実兼が言祝いだ歌であり、女性の加階を言祝ぐ数少ない例である。この歌には『実兼集切』に「いろそふることの葉にこそくものうへやのほるみはしのかひもしらるれ」という為子の返歌があったことがしられる。<sup>(18)</sup>実兼とともに持明院統に尽くした『玉葉集』撰者為兼にとって、即位にともなう姉為子の叙位はこの上ない慶びであったと想像される。井上氏は、為子がこのとき「六十歳近くの「老体」であった」こと、実兼と為子が「少時より昵懇であった」ことを指摘している。実兼が為子に贈った歌には「かひもあるかな」とあり、弁内侍が大納言三位に贈った歌にも「かひありて」とある。大納言三位はこのあとに後嵯峨院の皇子皇女を生

んでいることから為子ほどの年齢ではないが、長年宮仕えをした「甲斐」を表しているものと考えられる。順徳院の『禁秘抄』<sup>19</sup>に「近代三位濟々、東宮并親王御乳母。又無何院女房等皆叙三位」とあるように、親王の乳母や親王を生んだ女房が三位を賜ることがある。この時に大納言三位が後嵯峨院の寵を受けていたかは不明だが、宮仕えの功勞によつて三位の位を賜つたと考えられる。

#### 四 三人の贈答歌

秋風の身にしむばかり嬉しきやなほ人しれぬ心なるらむ

(少将内侍)

かひありて今こそ三つの位山まよはぬ道はなほぞ嬉しき

(弁内侍)

身にしみて嬉しきものと今ぞ知るただ大方の秋の初風

(大納言三位)

この三首は、少将内侍と弁内侍の歌を大納言三位に送り、大納言三位から歌を送り返されたという構成になっている。

次に挙げる『源三位頼政集』のように「嬉し」という言葉だけで叙位や加階を表す例もあり、少将内侍の歌だけでも十分に叙位に対する祝辞となる。

#### 『源三位頼政集』

殿上のことを女房大輔がもとよりよろこびつかはすとて

『弁内侍日記』の大納言三位殿 — 叙位の章段をめぐって — (芹田)

よそにきく袖にもあまるうれしさをつつみあへずやあまのは衣

五九三

返し

たもとをば立ちこそかふれうれしさをかさねてつつむ袖のせばさに

五九四

また、岩佐美代子氏<sup>20</sup>は少将内侍が次の『後拾遺集』の歌を祝意に転じた指摘している。

#### 『後拾遺集』 秋下

選子内親王いつきときこえけるとき九月のをかあまりにあ

か月ちかうなるまで人人ながむるに、きしかたゆくすゑもか

かるよはあらじなごいひてよみ侍ける

齋院中務

月はよしはげしき風のおとさへぞみにしむばかり秋はかなしき

三三九

「秋」の「風」が「身にしむ」という表現は例が多いが、宝治元年(1247)の『宝治歌合』には十一首、宝治二年(1248)の『宝治百首』には十五首詠まれている。後嵯峨院や為氏、公相、公基、実雄といった歌壇を代表する歌人たちによつて用いられており、後嵯峨院歌壇においても好まれた詠み方であったと言えよう。弁内侍、少将内侍も次のように詠んでいる。

#### 『宝治百首』

秋廿首 早秋

少将内侍

秋きぬといはぬをしるは吹く風の身にしむ時の心なりけり

一二三七

弁内侍

身にしむも思ひをそふるつらさにてなどいひしらぬ秋のはつ風

一二三八

少将内侍が詠んだ「人しれぬ心」という言葉は、大納言三位の叙位に對してもの数でもない自分から祝意を述べたいという謙遜であろうが、次に挙げる『兼輔集』や『新勅撰集』の歌のように恋歌で多く用いられる言葉である。秋風によって秋の到来を「知る」のは常套であり、そこに恋歌のような言葉を用いて祝意を表したところに、少将内侍の大納言三位に対する親しみと敬愛が表現されていると言えよう。

『兼輔集』<sup>(21)</sup>

女

人しれず思ふ心は秋はぎの下葉の色にいでぬべらなり 四三

『新勅撰集』恋二

女につかはしける

前大納言隆房

ひとしれぬうき身にしげきおもひぐさ思へば君ぞたねはまきける

七七四

また、「身にしむ」という言葉も、秋風にかぎらず次の『詞花集』や『新古今集』に挙げたように恋歌に多く用いられている。恋歌ではつらさをあらわす言葉であるが、それを岩佐氏が指摘しているように「身にしむばかり嬉しきは」と祝意に転じたのだろうか。

『詞花集』恋上

題不知

うれしきはいかばかりかはおもふらんうきは身にしむものにぞあ

りける

二二三

『新古今集』恋五

水無瀬恋十五首歌合に

藤原定家朝臣

しろたへの袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋風ぞふく

一三三六

一方、弁内侍が詠んだ「位山」という言葉は叙位を表す言葉であり、「位山」と詠むことよって大納言三位の叙位を言祝ぐ歌であることを強く表現したのだと考えられる。

『弁内侍日記』における弁内侍と少将内侍の歌は、章段よって、同じ内容を違う言葉で詠んだり、ふたりが異なる視点から歌を詠んだり、さまざまな歌の詠み方が試みられている。例えば四六段には、寛元五年(1247)の五月十日頃、西園寺家の北山第に西園寺実氏がいるころ、女房たちが北山第にほととぎすの初音を聞きに行ったと書かれている。このときに実氏が詠んだ歌「時鳥たづねに来つる山里のまつにかひある初音をぞ聞く」をうけて、少将内侍が次の歌「時鳥さこそは山のかひありて大宮人も初音聞くらめ」を、弁内侍が「雲居よりたづねざりせばほととぎす初音も山のかひやなからん」の歌を詠む。女房達が聞きに来た甲斐があつて時鳥が鳴いたと実氏が詠み、姉妹ふたりが違う形で実氏の歌に応えている。少将内侍は実氏の詠んだ「か

ひある」をひいて「かひありて」と詠み、弁内侍は「たづねざりせば（略）かひやなからん」と二重否定を用いて実氏の歌に応じるといふかたちで、これはおそらく意図的に、姉妹ふたりが別々の詠み方をしているのだろう。この九九段でも、少将内侍が当該の季節である「秋」を詠み、「嬉し」という言葉のみでひかえめに祝意を表しているのに対し、弁内侍は「三つの位山」と叙位に対する祝いの歌であると示したのだと考えられる。少将内侍からは今の季節に寄せて恋歌のような表現を用いた歌を贈り、弁内侍からは過去の功労を称えつつ明確に祝意を表した歌を贈ったのだろう。もしくは弁内侍の歌はこのときに贈った歌ではなく、日記執筆時に新しく作った歌であろうか。

なお、四条天皇の御代、嘉禎二年（1332）に弁内侍の兄弟である為継が詠んだ「位山」という言葉をふくむ叙位の歌がある。季節は冬であるが、「位山」「まよはぬ道はなほぞ」までの言葉が一致しており、弁内侍がこの歌を参照したことは間違いないだろう。

『風雅集』雑歌下

嘉禎二年十二月、四位の従上に叙して慶を奏しけるに、雪い  
みじくふり侍りければ 従三位為継

くらゐ山かさなる雪にあととめてまよはぬみちはなほぞかしこき

一八〇八

『弁内侍日記』に載せられている女性の歌は、弁内侍と少将内侍姉妹の歌が多くをしめている。姉妹以外の女性の歌は、後嵯峨院御所や

大宮院御所など内裏以外に仕える女性の歌ばかりであり、内裏女房である大納言三位の歌を載せているのはきわめて珍しい例である。<sup>(22)</sup>

大納言三位は、少将内侍の歌から「秋風」と「身にしむ」と「知る」を、弁内侍の歌から「今」を、ふたりの歌から「嬉し」をひきつつ、叙位にあずかったのは「ただ大方の」ことだと思っていたと述べて謙遜している。

また、さきに挙げた『玉葉集』の歌では、実兼が「のほるみはしのかひもあるかな」と詠み、それに対して為子が「いろそふることの葉にこそくものうへやのほるみはしのかひもしらるれ」と返している。実兼が歌で祝意を述べたことを「いろそふることの葉」と表現し、その歌のおかげで、自分が三位になったこと、すなわち「のほるみはし」の甲斐を知ったのだと実兼の歌に感謝する返歌である。大納言三位も同じように「身にしてみて嬉しきものと今ぞ知る」と、弁内侍と少将内侍の祝賀の歌によって叙位の嬉しさを身にしてみて知ったと感謝を返している。大納言三位は専門歌人ではないが、ふたりから贈られた歌の言葉をふまえた上で、祝賀の歌に対する返歌の作法に従って歌を返したのだろう。

## 五 おわりに

大納言三位が詠んだ歌は他に伝わっておらず、歌壇とも関わりはなかったと考えられるが、その皇女の延政門院に仕えて新大納言と呼ば

れた為氏の娘がいる。『玉葉集』六首、『風雅集』二首、『新拾遺集』一首の入集を見た京極派の歌人で、為兼主催の和歌行事に多く参加した。延政門院一条と名乗る女房も『統千載集』に入集し、『兼好法師集』に二首の贈答歌が載る。また延政門院が幼いときに後嵯峨院に贈った謎かけ歌「ふたつ文字牛の角文字すくな文字ゆがみ文字とぞ君は覚ゆる」も『徒然草』第六二段におさめられている。後嵯峨院を「こひしく」思うと述べた歌である。多くの歌人を輩出した西園寺家の生まれでもあり、大納言三位本人は歌を多く詠む女房ではないものの、和歌に対して理解のある女性だったのだろう。

『弁内侍日記』には弁内侍と少将内侍姉妹と、他の特定の女房や殿上人との親密さはあまり見られない。誰に対しても一定の距離と敬意を持って描いており、この大納言三位とも特別に親しく語り合うような場面はない。しかし、多くの女房のなかでも弁内侍や少将内侍の歌才に理解を示す女性である一面が描かれており、この章段からも大納言三位への敬愛が感じられる。西園寺家は後深草天皇の外戚であり、また後嵯峨院歌壇の中心となる歌人を輩出した一族でもあった。大納言三位の叙位を和歌をもって言祝ぐことは、ひとつには西園寺家に対する祝賀であり、また同時に、『弁内侍日記』にたびたび言及されるように、弁内侍と少将内侍の歌才を認めて高く評価してくれることへの感謝でもあったのだろう。大納言三位は、和歌という形で叙位を言祝ぐ相手としてふさわしい女性として、『弁内侍日記』に記されたのではないだろうか。

注1) 岩佐美代子氏校注・訳「弁内侍日記」(長崎健氏ほか校注・訳 新編

日本古典文学全集『中世日記紀行集』小学館 一九九四)

(2) 物集高見氏『新註皇學叢書 第四卷』(廣文庫刊行會 一九二八)

(3) 仏書刊行會 大日本仏教全書 第188冊『華頂要略 門主伝第二』(名著普及會 一九八二)

(4) 角田文衛氏 五來重氏『新訂増補史籍集覽 第二冊 公家部 年代記篇(二)』(臨川書店 一九六七)

(5) 『華頂要略』は慈助法親王の母を「大納言二位禪尼」とするが、誤りか。

(6) 秋山喜代子氏「乳父について」(『史學雜誌』九九(七) 一九九〇・七)、

同氏「養君にみる子どもの養育と後見」(佐々木潤之介氏ほか編『日本

家族史論集』一〇 吉川弘文館 二〇〇三)

(7) 寺本直彦氏『源氏物語受容史論考 続編』(風間書房 一九八四)

(8) 井上宗雄氏『鎌倉時代歌人伝の研究』(風間書房 一九九七)

(9) 松尾聡氏 永井和子氏校注・訳 新編日本古典文学全集『枕草子』(小学館 一九九七)

(10) 中野幸一氏校注・訳 新編日本古典文学全集『うつほ物語2』(小学館 二〇〇一)

(11) 中野幸一氏校注・訳 新編日本古典文学全集『うつほ物語3』(小学館 二〇〇二)

(12) 鈴木一雄氏校注・訳 新編日本古典文学全集『夜の寝覚』(小学館 一九九六)

(13) 阿部秋生氏ほか校注・訳 新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館 一九九六)

(14) 久保田淳氏校注・訳 新編日本古典文学全集『建礼門院右京大夫集』(小学館 一九九六)

(15) 岩佐美代子氏『竹むきが記全注釈』(笠間書院 二〇一一)

(16) 和歌の引用は『新編国歌大観』により、表記を私に改めた。

(17) この歌について岩佐美代子氏『宮廷女流文学読解考 中世編』(笠間書院 一九九三)、井上宗雄氏『京極為兼』(吉川弘文館 二〇〇六)

に詳しい。

- (18) 石澤一志氏『実兼集』の成立とその性格」(『和歌文学研究』  
八七 二〇〇三・一二)
- (19) 続群書類従完成会『群書類従 第二十六輯 雑部』(続群書類従完成  
会 一九六〇)
- (20) 注(一)に同じ。
- (21) 『続古今集』には「いでぬべきかな」とある。
- (22) 拙稿「女房日記としての『弁内侍日記』の和歌」(『中世文学』第六〇  
号 二〇一五・六)